



第140号
2024年 6月 1日発行
千葉大学教育学部
同窓会
〒263-8522
千葉市稲毛区弥生町1-33



中日新聞編集局長 清水俊郎 (H元・3卒)

社会を育む

「大学で小学校の先生になるための勉強をしていた」と昔話をしたら、エジプト人の助手に涙ぐまれたことがあります。

「私の国ではつい最近まで、高等教育を受けた人は小学校の先生になりませんでした」。

二〇一一年二月、首都カイロにあるタハリール広場。飛び交う催涙弾から身を守るため、ふたりで雑居ビルの陰に二時間ほど隠れていた際のことでした。

北アフリカのチュニジアから始まった中東の民衆革命「アラブの春」のまっただ中。エジプトでも、三十年間にわたり独裁者として君臨した大統領の退陣を求める反政府派と親政府派のデモ隊が激しい衝突を繰り返していました。

双方とも、広場の石畳を引きはがして投石に。刃物を振りかざす者、猟銃を撃ち放つ者、ラクダで敵のデ

モ隊に突入してこん棒を振り回す者もいました。警察隊は反政府派のデモ隊に向けて催涙弾を水平に撃ち、政府は、反政府派の連絡手段を断つために、国全体のインターネットを遮断しました。

そういった混乱ぶりを取材するため、世界中のメディアがこの広場に集まっていたのです。

「エジプト人として、とても恥ずかしいです。見世物みたい」と助手は悔しそうにつぶやきました。「教育をおろそかにしてきた結果がこのありさまなんですよね」。

今度はこちらが恥ずかしくなりました。教育環境が整った国で、私自身は行き当たりばったりで生きてきたからです。

自分の進路を真剣に考えることなく、千葉大教育学部に滑り込みました。ろくに準備をせずに臨んだ教員採用試験は不合格。教育社会学の

紙面紹介

特別寄稿	6面
学校現場から	2面
学校現場へ	3面
会員のいきいき だより	4・5面
私の学園生活	7面
卒業を迎えて	8面
現役の学生から	8面
読者の声	9面
我が学舎の今昔	9面
学舎の今	10面
支部だより	10面
新入生の声	11面
事務局より	11面
物故会員	11面
同窓生の美術館	12面
編集後記	12面



明石要一先生の研究室の仲間につき合っ受けた新聞社のひとつである中日新聞(東京新聞)にたまたま入社し、記者やデスクをしました。

採用試験の面接で「教育の専門記者になる」とたいそうな動機を語った覚えがありますが、三十数年経ってもそんな立派なもの書いたことがありません。事件や選挙の担当が長かったのですが、三十代で心筋梗塞を患って内勤デスクに。取材の最前線に戻りたくて四十代でパリ支局に赴任しました。

現在はデジタル部門の担当。同窓生の少ない業界ですが、養護学校教員養成課程出身の竹内恵さん(旧姓・小出、H12・3卒)が同じ編集局で働いています。

さて、最近では教職の志望者が減っていると言います。

私が現在住んでいる愛知県では、教育委員会が公立小中学校で教育実習生として受け入れた学生を教員採用試験で事実上囲い込んでいたことが年明けに発覚して大騒ぎになりました。沖縄では、大学生に臨時

免許を与えて、非常勤講師として任用する動きもあるそうです。

給与や勤務時間など待遇面の改善が必要でしょう。業務の合理化も重要なのは私よりも先生方がご存じの通り。文部科学省の調査では、二〇二二年度に「心の病」で休職した公立学校の先生が過去最多の六千五百三十九人に上ったとか。プレッシャーの緩和が大事かもしれません。

ただ、この国で意見が対立した時、たいがいの場合、刃物や銃やラクダやこん棒抜きで解決するのは教育のおかげです。大災害のたびに、炊き出しの列に被災者が整然と並んでいることが他国から称賛されるのも、世界屈指の治安の良さも、確かな教育の成果ではないでしょうか。

新聞記者の仕事はおおむね大好きですが、当然のことながら嫌になることもあります。そんな時はいつも「隣の芝生」でうらやましくなります。

先生は人だけでなく、社会も育む職業なのですから。

特別寄稿



オペラ歌手になって

細 晃子 (尾形 晃子)

(S.60・3卒 千葉市)

「千葉大学教育学部出身のオペラ歌手がいる。たぶん三十代」。

昨年十月一日の千葉市民会館大ホールでの喜歌劇「こうもり」公演をご覧になったOGが、こちらの同窓会報の編集長に連絡してきたそうだ。

さっそく名簿を調べたところ、どうも首を傾げたらしく、同月下旬の「細晃子 (尾形晃子) ソプラノリサイタル」を見にやってきた。「いやあ、若いですね」。

舞台メークの威力はすごい。本人は、オペラの役柄の明るい



オペラ「こうもり」アデーレ

性格を演じるのが楽しくウキウキしており、リサイタルの舞台では、ホールに響く自分の声に、なぜだか「生きている」と感じ、残りの曲数が減っていくのを名残惜しんでいる。もしかしたら、そんな気持ちの表情が、若く見えるのかもしれない。

まだ幼い頃、お友達の家ピアノが来てから毎日のように、徒歩十分くらいのお宅まで一人で通ったそうである。そんなに好きならばと、我が家にもピアノが来た。四歳の時だった。

千葉大学教育学部中学校音楽科の入試の実技試験は、主に歌とピアノで、入学した頃はどちらも同じくらい目立たないレベルだった。母校の千葉東高校の音楽部の先生に勧められ、千葉大学合唱団に入団した。そこに、合唱指揮者の栗山文昭先生がいらっしやうった。超難解な合唱曲が栗山先生の手にかかると音楽が動き出すようだった。その頃から発声を意識し始

め、卒業演奏ではピアノではなく、声楽でトリを務めた。

二十数年前に音楽療法に出会った。音楽療法は、簡単に言うと、音楽の様々な特徴を生かして音楽を使うことで、健康や生活の質の向上に役立てるといいうものである。

対象は、高齢者施設、精神科、障がい者・児、パーキンソン病患者やホスピスなどだが、最近では、認知症・閉じこもり・うつ病予防や口腔機能向上などの介護予防でも多く行われている。

まだ駆け出しの頃、ある高齢者施設に、なだれかかるように車いすに乗り、目は閉じ、よだれも垂れた八十代の認知症の男性がいらっしやうった。グループで「春の小川」を歌い終わった時、その男性が急に立ち上がり、「そうだ、僕は川に落ちた一年生を助けたんだ」と大声で言い放った。音楽の力を感じた初めての瞬間だった。

地域の高齢者の集まりで音楽療法の最後に歌を歌ってみた。拍手、ため息、呆然とする様子、涙ぐむ方もいらっしやうって、生の歌声は人の心に届くのだと感じた。

ある日、三年前にご主人を亡くしてふさぎ込み、閉じこもりにな

った女性がいらっしやうった。私の歌を聴き、「今まで何をしていたのだろうと、はっとした」と、前向きになったその方からお話いただいた。

つき動かされるようにこの道に入り、すぐれた指導者に巡り合い、音楽には人の心を動かす力があると確信を得て今に至る。

楽器としての声を維持するには日々鍛錬しなければならぬし、努力を手放して開放されたいと思うこともある。けれども、演じ、歌う時の高揚感、幸福感を得られるうちは、ずっと歌い続けていきたい。

本当に若いのか？リサイタルにぜひ見いらしていただきたい。

二期会会員、東京室内歌劇場会員、日本音楽療法学会認定音楽療法士。

次回「細晃子ソプラノリサイタル」は令和七年三月二日(日)十四時から浦安音楽ホールにて作曲家寺嶋陸也氏のピアノ伴奏で開催します。

細晃子さんの歌声はこちらから↓



会報140号

コロナ禍前後の 大学教育の変化

教授 戸田善治

この数年で、竹内裕一先生(社会科教育)、井上孝夫先生(社会学)が定年退職され、金慧先生(哲学)が他大学に異動され、阪上弘彬先生(社会科教育)、山本響子先生(法学)が着任されました。

コロナ禍前後で大学教育は大きく変わりました。一つは、メディア授業の充実です。コロナ禍では、対面式授業が出来ない、それが可能となっても一教室に収容できる人数が制限されるなど、様々な制約がありました。その一方で、moodle、Teams、Google Classroomなど、ウェブを活用したメディア授業等のためのシステムが充実しました。コロナ禍後に対面式授業が可能となりましたが、これらのシステムを授業前後や授業中に活用するいわゆるハイブリッド型授業がめずらしくありません。教師は授業前に課題や史料資料をアップし、学生は予習をして授



業に臨む、授業中に教師が指示した動画やカラー史料を活用する、課題ワークシートを授業中に提出し、グループ討論などのアクティブラーニングを行う授業などはめずらしくありません。また、教科教育法の授業では、学生が模擬授業を行い、その動画をmoodleにアップし、「事実」に基づいて改善案を提案しあうなど、実践的な教育も行われています。

コロナ禍とは直接関係ありませんが、もう一つ、いわゆる全員留学が本格的に導入されたこともあげられます。教育学部は学部改組の関係上、二〇二二年度入学生から全員留学が導入されました。二〇二三年度は、梅田克樹先生(地理学)等の引率の下、約四十名の学生とともに二週間ほどヨーロッパに滞在し、ライブツイヒ大学日本学科の学生と交流を行うなどしました。



ライプツィヒ大学

流山市支部

支部だより

君津市支部

流山市は都心から約25km圏内の県北西部に位置し、水と緑の豊かな自然が息づく都市である。また流山市は、明治維新直後に当時の印旛郡印旛郡流山町にある常与寺に、印旛官員共立学舎が創設され、千葉大学教育学部の発祥の地としても知られている。

現在の流山市は、平成十七年の「つくばエクスプレス」の開業により、子育て世代の急激な人口増が続いている。市内には小学校十七校、中学校十校の二十七校があったが、令和六年四月には小学校二校が新たに開校し、二十九校となった。そのような状況下の支部には教育学部の同窓生として百二十二名の会員がいる。

支部全体で一堂に会しての活動はなかなか難しい状況である。同じ教育学部で学んだ同窓生として、会議や研修会で同席すると当時の話が出てきたり、切磋琢磨して研修を深めたりするなど、卒業してもなお、心強い存在が周囲にいる。今後も同窓生同士の交流を深め、また互いに良い影響を受けつつ成長できるようにしていきたい。

(文責 弘永修二郎)

君津市支部は、現在市内を十三地区に分け、各地区に代表の理事を設け、理事を通して千葉大学教育学部同窓会報や支部総会の案内文書等を配付している。

支部長・副支部長・事務局長・事務局次長で役員会を開き、支部における年間計画・総会・理事会に向けての話し合いを行う。理事会では、総会の資料検討・担当地区の状況報告を行う。

コロナ禍でやむを得ず総会の中止が続いたため、令和三年度に会則の一部見直しを行い、四年度より、「やむを得ない事由により総会を開けない時は、理事会の議決を持って総会の議決とみなす」と改正した。

現在、会員は二百名余りだが、個人情報保護の関係から、新会員の把握に苦労している。高齢会員の現状把握も同様である。

支部会則に「本会は会員相互の親睦と連絡を目的とし」とある。

総会とその後の懇親会は、活動状況の把握と会員の情報交換にとっても有意義となっている。この絆を今後

(文責 川上清)

同窓生の美術館

土に親しみながら



国画会会員 岡野重義

(S43・3卒 成田市)

御料牧場に近い農村に生まれ育った私は、牧歌的な豊かな自然環境で少年時代を送ることができた。農家育ちの私にとって、土は労働や遊びの対象であり、深い愛着を感じていたようだ。

彫刻を手がけるようになっていくつかの材料に触れてきたが、私には土がいちばん相性

がよいようだ。

今回の出品作品「ある記憶」の彫刻材料は、テラコッタ（土を素焼きにしたもの）だ。粘土で形を作り、内部をくりぬいて乾燥させ素焼きにするため、手や指の痕がそのまま残る部分もあり、素朴な温かさを出してくれる。もろくこわれやすいが、辛うじて、形を保ちながら静かに語りかけてくるようなところがある。

今後土の奥深さ、力強さを追求していければと思う。

北総の自然に感謝しつつ土に親しみながら……。



「ある記憶」
第89回国展出品

編★集★後★記

大学からの帰り道、けやき会館まで来ると、図書館前の木陰からギターの音と学生三人の姿。同窓会の仕事で時々大学に来るようになって三年、ギターの音を聞くのは初めて。▼家に着くと編集長から速達が届いていた。急いで開封して見出しをめくる。夕食のビールは一缶で我慢して原稿を読み進める。今回もバラエティに富み、読み応えがある▼「読者の声」富松孝枝さんの「人生の歩き方とでも称される趣」との評は嬉しい。巻頭言の清水俊郎さんをはじめ、同窓生のさまざまな人生の歩き方を読むのは実に楽しかった。コロナ禍前後、禍を福となす様子も心強い。▼若い人たちの投稿を読みながら、ギターの音や歌声がそこかしこから聴こえた約半世紀前のキャンパスが蘇る。学生諸君には、面白可笑しいキャンパスライフを満喫してほしいなあ。きつと人生を歩く足腰が強くなるから。▼特別寄稿「オペラ歌手になって」の末尾にあるQRコードから細見子さんの美しい歌声を是非お楽しみください。今後皆様臨場感のある記事をお伝えして参ります。

(文責 大村 尚)